

中近世の奈良

ひがしてらばやし はやしこうじ
東寺林町・林小路町他 中近世奈良遺跡

平安時代後期～江戸時代（11世紀～18世紀）

都が京都に移ると平城京の大部分は田畑となりましたが、平城京の東部、東大寺や興福寺、春日大社といった社寺の周辺には社寺に仕える人々が住む奈良の町ができていきました。漆塗の椀を模したと考えられる瓦器椀や土師器皿は平安時代後期から鎌倉時代にかけて寺院の法要や神社の祭礼に一度だけ使う食器であったとも考えられており、奈良の町から多く出土します。江戸時代の土師器には「かわらけ」とよばれる灯明皿、焙烙などがありますが、商品流通の発展により食器は清潔で美しい伊万里焼や有田焼と呼ばれる肥前磁器が全国的に使われるようになり、現在の私たちの食器へとつながっていきます。



中世の土師器



中世の瓦器



近世の土師器



近世の肥前磁器